

文献9)

4. 宮脇正和 他：超低出生体重児に肝芽腫を合併した1例、日本未熟児新生児学会雑誌、14(2)、201-204、2002。（和歌山県立医科大学周産期部 NICU）

論文要旨(抄録)：

超低出生体重児に肝芽腫が合併する頻度が高いことが報告されている。入院経過中に臨床的肝芽腫と診断された。在胎33週0日に出生体重852グラムの不当軽量児(small for dates)の1例を経験した。両親が肝芽腫に対する治療に同意しなかったところから、児は自然経過をとり死亡した。本症例では肝芽腫発見までにフロセミド、スピノラクトンなどの薬剤を長期に投与しており、呼吸障害に対して高濃度酸素を使用していた。また胸部、もしくは胸腹部単純X線を合計48回撮影していた。いずれかが新生児の未熟性の強い肝細胞に作用し、腫瘍化を導いている可能性がある。超低出生児に対する治療が進歩し生存率が改善している現在、肝芽腫が重要な生命予後に関与する因子となりうる。超低出生児には腹部エコーを急性期のみならず安定期にも行い、肝芽腫の早期発見につなげる必要がある。